

## 対人関係の持続・安定性に関する研究

——友人関係における衡平理論の検討——

松 浦 均

### I. 問 題

対人認知・対人魅力・印象形成等、今までの対人関係に関する研究は、極めて一時的・停時的な人間の社会的行動を言及するものであり、日常の実際の対人行動そのものを説明できているとはいえない。日常の対人関係はその個人をとりまく社会の中で時間の経過とともに様々に変化する。このような対人関係の発展や変容の機制や経過を明らかにすることは、今後の対人関係の心理学の体系を確立する上で最も重要な課題の一つである。

ところで対人関係の持続や発展を支える条件としてはいくつか挙げられるが、本研究では「互恵性」の条件に焦点を当て、互恵的な関係をうまく説明している「衡平理論」について考えてみる。衡平理論の代表的な研究者 Walster, E. et al (1973) は「関係が衡平であるほど、その関係は長続きする」と述べ、関係が衡平であることが関係持続の条件であることを示唆する仮説を提供している。また「人間は不衡平な状態にある時に苦痛を感じる」とし、その苦痛解消のためには、不衡平を回復するように努力するか、その関係を放棄離脱するとしている。つまり衡平であることが関係を安定させ持続させていくと考える。この考え方は、先行研究では、主に夫婦関係や恋愛関係に適用され、理論の検証が行われているが、本研究では、日常もっとも一般的な対人関係である友人関係を対象として衡平理論の適用可能性について調べる。

### II. 研 究 I

ここでは一般的な大学生の友人関係（主に日常行動を共にしている友人）における衡平性を多角的に検討する。相手との関係について普段「衡平性」をどのように認知しているかを調べ、同時に普段抱いている感情や気分、それらの関連から関係の安定性と持続可能性を見ようとするものである。研究 I では、基本的には Walster ら (1973) の考え方に基づくが、彼らの考案した不衡平値算出式には、多くの問題点を含んでおり（例えば、値の求め方が極めて複雑であり、かつ求められた値は現実の損得意識の感覚とは矛盾する場合もあり妥当な算定法とは言い難いところがある）、今回は自分で考案した式を用いて不衡平値を算出することにする。

研究 I の結果はだいたい次のようなことであった。今回対象とした友人関係（大学 2 年生、男子 31 名、女子 11 9 名）の場合、過小利得者（相手に比べて自分の方が損をしていると認知している者）はほとんどおらず、衡平利得者が約半数を占め、残りは過大利得者（相手に比べて自分の方が得をしていると認知している者）であった。以下の分析では、過大利得者を利得の大小で 2 群に分け合計 4 群にして 4 群間の比較検討を行った。まず、全体的傾向としては、自他のインプット・アウトカム評定に関しては、自分のインプットに対して相手のそれを有意に大きく評定しており、自分のアウトカムの方が相手のそれに比べて大きく評定していた。過大利得者が多い原因である。4 群比較では、過大利得者ほど自分のインプットを相手のアウトカムをかなり低く評定しており、逆に相手のインプットと自分のアウトカムを高く評定していた。

持続・安定性の尺度として、4 つの気分（満足感・幸福感・腹立たしさ・申し訳けなさ）と持続意志と予想をたずねたところ、4 群間で満足感と腹立たしさにおいて群差が見られた。すなわち過大利得者ほどポジティブな感情を抱いており、当初の仮説を支持しない結果となった。この結果はむしろ、Walster et al (1973) の命題 I 「自分のアウトカムが最大になるように人は行動する」を支持するものであり、友人関係においては、自分が得をしていることで「申し訳けなさ」を強く感じたり、「満足感・幸福感」まで否定的にとらえている訳ではないことを示している。

### III. 研 究 II

今までの衡平理論の考え方では、相手との関係が衡平であるかどうかを、被験者個人の認知に基づいて規定している。しかし、これでは、相手が同じように認知しているかどうか（被験者が「衡平」と認知していて相手も「衡平」と認知しているかどうか）わからない。確かに普段は、独自の認知に基づいて行動しているのであるが、将来への関係の持続・安定性を考えると、この認知が実際と一致しているかどうかは極めて重要なことである。したがって研究 II では、友人関係を形成している 2 人ともに調査に協力してもらい、お互いに相手をターゲット

人物として同じ質問に回答してもらうという方法をとった。2人の回答結果を直接照合し、お互いの認知が一致しているかどうか確認した。認知が一致しているペアは安定性が高く、認知にズレがあるペアは安定性が低いであろうと仮定し、分析に入った。

衡平性に関する認知のズレの構造については、不衡平性のズレの他に、自他のインプット・アウトカム評定各々についても値の違いを求めた。さらに、自分のインプットを相手がアウトカムとして認知している訳であるからこのような自他のインプットとアウトカムの組合せを設定しこれらについてもズレ値を求めた。それぞれ認知のズレの大きさが他の変数に与えている影響を調べた。その結果、自分のアウトカムに関する双方の認知のズレが、「満足感・腹立たしさ・TMI<sup>1)</sup>」の尺度での認知のズレと相関が高かった。この結果から、友人関係において気分を支配しているのは、「自分のアウトカムが大きいかどうか」ということであることを示しており、やはり衡平命題Ⅰを支持するものであった。また、自他のインプットとアウトカムを組み合わせさせたズレ値は3種類とも「関係の安定感」の認知ズレと相関が高く、例えば、相手がインプットしてくるものを自分のアウトカムとして確実に認識できていないペアでは、安定感の認識にもズレがあって、関係の安定性が低いことがうかがえた。この結果は極めて興味深いものであった。

#### IV. 研究Ⅲ

研究Ⅰ・Ⅱではターゲット人物として被験者には大学入学後友人関係を形成し、現在もその関係が続いているという相手を想定してもらったが、研究Ⅲでは、同じ被験者に、大学入学後に友人関係を形成したが現在は既にその関係が解消している相手を想定してもらい、研究Ⅰで実施したものと同一内容の調査に回答してもらった。結局、被験者に2人のターゲット（今の友だち—研究Ⅰ、昔の友だち—研究Ⅲ）について回答を求めたことになり、研究Ⅰの結果と研究Ⅲの結果を比較することにより、衡平性の観点から関係の持続要因を明確にすることを目的とする。衡平理論に即して考えると、既に消滅した関係は現在も続いている関係に比べてより不衡平な状態にあったと考えられる。

結果を見ると、関係継続状況に比べ関係消滅状況では、過大利得者が減り、過小利得者が多くなっていた。不衡

平状態でも得をしている過大利得者は減っていることから、友人関係の場合は一概に不衡平状態が関係解消をまねくのではなく、「損をしている」感覚の方だけが意味のあるものになっている。衡平性に関する自他のインプット・アウトカム評定値は、関係継続状況に比べていずれも低く消滅した関係では交換量そのものが全体的に少なくなっていることがわかる。実際の社会的交換行動の頻度は、ほぼ全ての項目で関係消滅状況が関係継続状況に比べて有意に低く、このことを裏づけている。

安定性の尺度では、4つの気分のうち3つで、そしてTMI、安定感の尺度とも関係消滅状況が継続状況に比べて有意差があった。この結果から、関係消滅状況では「満足感・幸福感」は充足されず、「腹立たしさ」だけが極だつ状況であったようだ。特に女子では衡平性4群間で「腹立たしさ」に差が見られこの気分が関係の継続の決め手になる可能性が高いことを示唆している。

#### V. 討 論

研究全体を通して、関係の安定性は過大利得者の方が高いという結果になり、Walsterら(1973)の衡平命題Ⅲ「不衡平状態にある者の方が苦痛の程度が大きく、安定性も低い」という仮説は支持されなかった。むしろ衡平命題Ⅰ「人は自分のアウトカムを最大にしようとする」傾向の方が強いことを支持するものであった。この結果は、夫婦関係や恋愛関係を対象としたHatfield et al(1982)、Traupmann et al(1981)、井上(1985)、諸井ら(1987)の結果が命題Ⅲを支持していることと異なっている。これは友人関係が、夫婦関係や恋愛関係のように相手を特定化することなく比較的自由にふるまえることから、不衡平を感じ苦痛を感じても、簡単に比較の相手を代えたり、その関係から離脱できることを示している。

今回の研究では、研究Ⅱのように関係を形成する2者双方からの分析を試みたが、実際の関係の構造がよくわかるという点で、対人関係のダイナミクスを研究する方法として望ましいものであろう。ただ今回は、2者間の認知のズレを見たにとどまり持続・安定性を実際に確認することができたわけではない。今後、安定性を測定できる妥当な尺度を開発した上で、今回の被験者の友人関係を持続していく様子を観察していきたい。

#### 文 献

- Walster, E., Berscheid, E., & Walster, G. W. 1973  
New directions in Equity research.  
Journal of Personality and Social Psychology.  
25, 151-176

1) TMI (Total Mood Index) = 満足感 + 幸福感 - 申し訳けなさ - 腹立たしさ  
総合的な気分の指標で、値が大きい程、ポジティブな気分を抱えていることを示す。